

諸法実相抄（信は道の源、功德の母）

いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給ふべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや。經に云はく「我久遠より來是等の衆を教化す」とは是なり。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり。未來も又しかるべし。是あに地涌の義に非ずや。剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし。ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給ふべし。

（六六六頁）

拝読の御書は諸法実相抄の一節でありますが、本抄は文底下種仏法の肝心を説かれた極めて重要な御書であります。対告衆は最蓮房日淨です。最蓮房は天台宗の学僧で、大聖人様より先に流罪されて佐渡に来ていましたが大聖人にお会いして折伏を受けて門下になつた一人であります。

ところで本抄は、仏法の道理を自分の人生や生活に当てはめて、絶えず己の弱い怠惰な性格を磨き、次々と襲つてくる宿業と対決して、微動だにしない不屈の境涯を築き上げなさいと、大聖人様は御書の中で教えられているのであります。

即ちある時は仏法結縁の宿縁論より、寂日房御書（一三九四頁）に「かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華經を弘むべきなり」と勧められ、又、諸法実相抄（六六六頁）には、「末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」と言われ、末法の時に生まれ合わせた果報より説かれ、又、阿仏房尼御前御返事（九〇六頁）には「浅き罪ならば我よりゆるして功德を得さすべし。重きあやまちならば信心をはげまして消滅さすべし」とあり、南部六郎三郎殿御返事（六八四頁）には「末代の悪人等の成仏不成仏は、罪の輕重に依らず但此の經の信不信に任すべし」と仰せられて、過去の謗法と罪障論より信仰を勧められ決定心を促されています。

また、四条金吾殿御返事（九九一頁）には「苦をば苦とぞとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合はせて、南無妙法蓮華經どうちとなへるさせ給へ。これあに自受法樂に非ずや。いよいよ強盛の信力をいたし給へ」と、寄せ来る諸難に粉動されない不退転の信仰を築くよう教えられています。冒頭拝読の最後の御文には諸法実相抄（六六八頁）に「行学の二道をばげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句なりとも）かたらせ給ふべし」と仰せです。

この諸法実相抄の御文は大変有名ですから、今更解説するまでもありませんが、しかし、時として真剣に自分を振り返つて見て、自分は惰性の信仰に流れていなかと深く反省しなくてはなりません。

大聖人様は「行学の一道をはげみ候べし」・即ち仏法の道理を信行実践し、その教えを深く体験の上に学んでいきなさい。

「行学たへなば仏法はあるべからず」・実践と学ぶ努力による智慧が無ければ仏法は観念論となつて、衆生救済の力とならず仏法自体が滅んでしまうのです。

「我もいたし人をも教化候へ」・自分も実践し他人にも力の限り教化して行きなさい。
「行学は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」・行学は日蓮正宗の正しい仏法を弘めていく為の実践努力と、勉強との仏道修行であると言われています。自分の力の限り「一文一句」でも他の人に語つていくことが大事なのです。

日蓮正宗の信仰とは、御本尊様を受けた後は自分勝手に信仰すればよいというのではありません。日蓮大聖人の教えをそのまま正しく伝え導かれる御法主上人猊下の御指南に随つて、末法の仏法僧の三宝を絶対唯一に信仰して、折伏という修行に代えることであります。その折伏を実践するためには、学ぶのが教学です。一文一句を脳裏に刻み、生活の実証の中で確信していくことが行学の一道を励むことです。しかし、教学を学ぶ上で、「理の教學」、即ち、実践の伴わない観念だけの教學となつてはいけません。

昔、提婆達多は六万法藏を体得し増上慢となり、やがて仏法を破壊し、釈尊の大怨敵となり地獄に墮ちました。故に大聖人様は十八円満抄（五一九頁）に、「總じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ。智者・学匠の身と為りても地獄に墮ちて何の詮か有るべき」と申され、当時教学ができ、弁説の巧みな三位房等、頭の良いのを鼻にかけて師匠である大聖人の教えを素直に聞こうとしない者達を厳しく戒められ、末代までの訓戒とされたのでした。

とかく教学があり信が無いと、相手を思いやり救つてあげる仏の使いであるという慈悲の精神が消えて、相手をやり込めてやろうという自讃毀他的慢心が起こりがちです。又、知っていることを全部並べ立て、薬の効能書を並べるセールスマン的な風潮にもなりかねません。これでは肝心の相手の胸に響く真心という面が欠けてしまいます。折伏とは御本尊様を信ずることの素晴らしさを相手に訴えて、相手の心の奥で眠っている仏心、御本尊様に手を合わせたいという心を搖り動かすことです。

大聖人様は、三三藏祈雨事（八七四頁）に「日蓮仏法をこころみるに、道理と証文とにはすぎず。又道理証文よりも現証にはすぎず」と申されています。

この現証を正しく勝ち取るためにも行学が必要なのです。「自分は現証がでない」という人がいますが、願いが叶わぬこと自体も一つの現証なのです。大聖人様は呵責謗法滅罪抄（七一八頁）に、「何なる世の乱れにも、各々をば法華經・十羅刹助け給へと、湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり」と教えられています。

過去遠々劫からの罪障を、この一生の信心で消滅しようとしているのですから、直ちに結果が出ることは中々ないのです。その時こそ、湿った木に火をつけるように、乾いた土から水を儲け出ること

るよう、忍耐強い努力が必要なのです。

世間の言葉に「酒に五味あり、人に五味あり」というのがあります。酒の五味とは「甘味、辛味、鹹味、苦味、酸味」のことです。人の五味とは「恨み、辛み、憎み、嫉み、僻み、嫌み」のことです。酒の五味はそれぞれの味わいに通じますが、人の五味は輕蔑と憎悪といふ人間としての欠点となつてしまします。大聖人様も「経を誦誦し書持する」と有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん。其の人命終して阿鼻獄に入らん」と言われています。

文の意味は法華經を読み持つ者を見て、軽しめ、賤しみ、憎み、嫉み、恨みを結ぶ者は命終つて阿鼻地獄に墮ちるという事です。天台大師は法華文句に「疑い無きを信と曰う」と仰せです。

信仰していると口では言つても、心中は何事も疑つてかかつてはいけません。

十四誹謗も不信をもつて体としています。不信は疑いの根本です。信仰は一人では出来ません。

異体同心事（二三八九頁）に「異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶う事なし」と申されていることを深く押さねばなりません。人には騙されても御本尊様からは騙されることはあります。

総本山六十六世日達上人は、「信とは隨順して疑わず」「信せば則ち所聞の理を会し、順ぜば則ち師資の道成す」と言されました。これは、信じて隨うとによつて、師匠より仏法の道理を会得する事が出来るという意味です。

摩訶止觀に二種の疑念が説かれ、これを征服せよと言われています。

「第一に自身を疑う」……人間は誰でも落ち込む者です。そのような時は自己嫌悪に陥り卑屈になり、自身に仮性があることが信じられなくなります。然し、自分の胸中には必ず幸福になる仮性を備えているのです。その幸せを築くために生まれて来ていると確信してください。そして病気や失業や不幸に出くわすのも、それは己を磨く為であると信じることです。自己を疑う心、愚痴の心を捨てなさいというのが第一の意味です。

「第二に師を疑う」……根本の師匠は大聖人様です。そして現時において私達を教導される方が唯授一人の血脉を受継がれた、時の御法主上人猊下です。仏法とは一人の大導師を立てて伝承される仕組みになつており、日蓮大聖人様から日興上人、日日上人と代々の御歴代上人に法水は流れているのです。

「第三に法を疑う」……根本の法とは經王殿御返事（六八五頁）に「日蓮がたましひをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ。仏の御意は法華經なり。日蓮がたましひは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし」と申された、本門戒壇の大御本尊様を信仰の根本法であると信じて信心に励むことが大事です。

皆様も日蓮正宗に入信した時に、御本尊様の前で御授戒を受けられ、

「今身より仏身に至るまで、爾前述門の邪師の邪義を捨てて、法華本門の正法正師の正義を持ち奉るや否や」「今身より仏身に至るまで爾前述門の誹法を捨てて、法華本門の本尊と戒壇と題目

を持ち奉るや否や」との誓いを御本尊様に申し上げたのであります。

その誓つた言葉に違うことなく、本門戒壇の大御本尊と血脉付法の御法主上人猊下のもとに、
御指南どおり信仰に励むことが大事であります。

その御指南どおり正しく実践し行学の二道に邁進するところに、「信は道の源、功德の母。一切の善法は之によりて生ず」との御言葉のまま、信心によつて自身の境涯を開く道を得て、功德をつかむことができる所以あります。信心即生活であり、「法華を識る者は世法を得べきか」の御金言のよう、生活に仕事に、より一層の活路を開いていけるのです。

信仰とは己を知り、転重輕受、変毒為藥する実践行であり、そこから仏法の道理を以信代慧として学び、御本尊様の功德を一身に受け切つていいく」とをいうのであります。

今年「折伏実践の年」も早くも四ヶ月を過ぎました、年頭に於いて心で決意し、御本尊様にお誓い申し上げたことを身をもつて実践し、眞の功德を積むと同時に御本尊様への御報恩を果たしていきましょう。以上。

（令和六年九月・御経日の砌）